

- 1 ページ  
人間のうた 深澤義旻
- 5 ページ  
遠藤被告に死刑判決、図面
- 6 ページ  
新実被告の判決を聞いて
- 8 ページ  
「人は死ぬ……」

長い間の重荷から  
解放された

遠藤誠一さん  
(京都府・京都大学大学院1年)  
「いっさいのものは、原因と結果の連続にすぎない。」この導師の言葉に、私は長い間私の心を縛りつけていた重荷から解放されたような安らぎを感じた。そして、ここまで真理を公開された導師の熱意に何とか報いなければならぬような気がした。

1985. 師走 17号

マ  
ハ  
ー  
ナ  
ー  
ナ

1988. 11月 27号



○ジューヱカ大師 (遠藤誠一さん)  
祝運卒尼時代の名医に由来するホーリー・ネームを授かった。導師の信頼も厚い。

素敵なお詩がありましたので、紹介します。 一窓口 滝本太郎

人間のうた

深澤 義旻

「うそをつくな」と、おれはいわない。  
大事なときに、うそをつかなければいいのだから。  
大事なときとは、  
自分を不幸にするかどうかというときだ。

「くそまじめにやれ」と、おれはいわない。  
くそまじめにやって損をすることが多いからだ。  
だけど、やらなければならないときは、  
どんなにつらくても、苦しくても、  
やりぬかなければならない。  
それは、自分をだめにするかどうかというときだ。

「けんかをするな」とおれはいわない。  
つまらないことでなければいいのだから。  
つまらないけんかとは、  
みにくい感情の剥きだしのことだ。  
そこからは、なんにも生まれてはこないのだ。  
だから、けんかは、つとめて避けるがいい。  
だが、始めたら、  
相手の息の根が止まるまで、  
もしくは、  
相手が完全に「まいった」と音を上げるまで、  
やめてはならない。  
なまはんか、相手に同情して、  
手をゆるめたら反撃されて、こちらの負けだ。

「だれとでも仲よくしろ」と、おれはいわない。  
ほんとうのなかまと、仲よくできればいいのだから。  
ほんとうのなかま——とは、  
手をにぎりあい、肩を叩きあいながら、  
自慢話をしあえる相手のことだ。

「いつも誰にでも素直でいろ」と、おれはいわない。  
素直になるもならぬも、  
それは相手によりけりだ。  
言ってることはほんとうか。  
それは、ほんとうによいことか、よくないことかを、  
よくよく確かめてからにしたらしい。  
たとえ、どんな相手でも、決して、  
おそれず、ばかにしないでだ。  
相手の目つき顔つき、ものの言いかたを、  
おちついて、よく聞き、見ていれば、  
たいがいピンとくるものだ。  
人に対する無条件な素直さではなく、  
真理に対する素直さをもつことだ。

「まちがいや失敗をするな」と、おれはいわない。  
大事なことをまちがえなければいいのだから。  
大事なことで失敗しなければいいのだから。  
まちがいや失敗をおそれてはならない。  
おれがいう大事なことは、  
二度と立ち上がれなくなるかどうかということだ。  
意思と体力で支えきれなくなるかどうかというときだ。  
他のまちがいや失敗は、  
星の数ほどあったにしても、  
少しもこわがることはない。  
まちがいや失敗から正しく学んでいくかぎり、  
自分を高めていけるからだ。  
まちがいや失敗を一つもしない人間は、  
結局、なんにもしなかったやつなのだ。  
口先だけで、何にもできなかったやつなのだ。

「いつも正しくあれ」と、おれはいわない。  
神様にも動物にもなれるのが人間だから。  
正しく美しいものに感動しながら、  
悪いことをまねるのも人間だから。  
喜びと悲しみを同時に受けとめることができるのも人間だから。  
いつ、どんなときにも、  
うんと喰って、うんとたれて、うんと眠るがいい。  
獣の眠りのように眠るがいい。  
そして、また、力を合わせて働こう。

「親に心配かけるな」と、おれはいわない。  
心と體が丈夫なやつほど、  
何かをしなければいけないやつなのだ。  
そうであるかぎり、何か、どこかで、  
親に心配かけるにちがいないからだ。  
親を喰らいつくして  
思いっきり勇ましく生きてゆけ。

幸せは祈って待ってるものじゃない。  
戦いにとっていくものだ。  
自分の弱さや醜さと戦いながら、  
目的と目標をしっかり決めて、  
それに向かって突進していくときに得られるものだ。  
それが自分を大切にすることだ。  
自分を大切にすることをためらうな。  
自分を大切にできないでいて、  
どうして、人を大切にできようか。  
自分を大切にすることが、同時に、  
人を大切にすることになる生き方を、  
なんとしてでも、  
見つけだし、作り出さねばならぬのだ。  
それは、人間にだけできるのだ。  
それが、人間の権利であり、義務なのだ。  
そのように生きていったとき、  
おれたちのまわりにも、  
人間らしい人間がいることに  
きっと気づいていくはずだ。  
ほんとうのなかまもできるのだ。  
そのことが、そうして生きていくことが、  
どれほど苦しく悲しく切なくても、  
自分の意志で選んだ道を、  
もうひき返さないぞと覚悟して、  
歩み続けていくならば、  
悲しみも、苦しきも、怒りも、  
人間の誇りにかえていけるのだ。

雨が降っても、  
曇っていても、  
見ろ、  
雲の上には、太陽がある。

<http://www.geocities.co.jp/WallStreet/1939/terani si .html>

# ジーヴァッカさんこと遠藤誠一被告に死刑判決

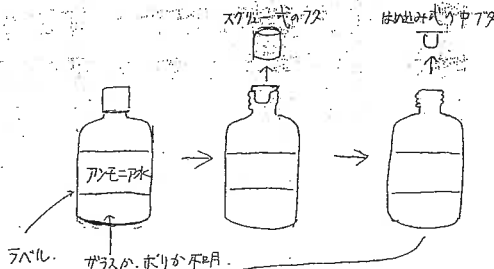
オウム真理教（アレフに改称）で化学兵器開発の中心的存在とされ、地下鉄、松本両サリン事件の実行役などとして計5事件で殺人罪などに問われた元教団幹部遠藤誠一被告（42）の判決で、東京地裁（服部悟裁判長）は10月11日「犯罪史上例を見ない極めて残虐な犯行」として求刑通り死刑判決を言い渡した。

4時間以上に及んだ公判の最後、服部裁判長が「被告人を死刑に処する」と話す時、遠藤被告はじっと裁判長を見詰めた。麻原彰晃被告（47＝本名・松本智津夫）への帰依を捨て切れず悩み続けたという遠藤被告は、極刑にも動揺した様子は見せなかった。

服部裁判長は、両サリン事件が麻原被告の指示で実行されたと認定。地下鉄事件で「遠藤被告は教団への強制捜査阻止のため使われることを認識した上で、サリン生成という重要な行為を担った」と指摘。「自ら生成したサリンをナイロン袋に詰め実行犯に届けるなど、殺人目的での使用を十分に認識していた」とし「使用目的まで知らなかった」との弁護側主張を退けた。松本事件の殺意も認定。滝本太郎弁護士サリン襲撃、VX襲撃の両事件も有罪とした。

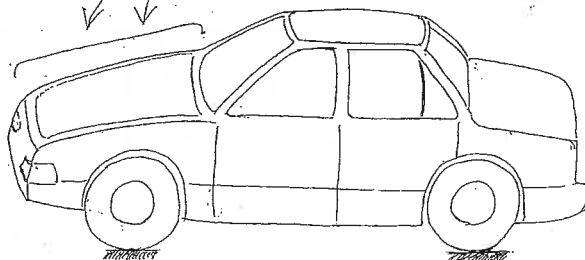
―――毎日新聞の報道より

実験



アンモニア水は、100cc以下の小ビンに入った、医療用のもので、半透明な中ブタが付いていた。私の部屋か治療室にあったものを使用。

平成8年2月9日



日時：犯行前日の昼間  
場所：教団外の人気のない所  
車：滝本弁護士と同一車種ということになった。

車のフロント部分の窓、2ヶ所にアンモニア水をかけて、車内に臭いが流入するかどうかを調べた。1ヶ所目は全く臭わず、2ヶ所目は車内まで臭った。この実験結果に基づいて、サリン散布位置を決めた。さんに教えた。

### —ミラレパさん判決を聞いて

元サマナ 男性 30代

● アレフからメール配信が有りました。久しぶりに見たら「千歳烏山国民対話室」の事が話題になっていました。相変わらず末端の方々は「形だけの穏やかな心」を主張する様にゴキブリを殺さない様子とか、いろんな事を言われた事に穏やかに答えていました。

● 新実の判決はニュースで見ました。彼は口の傷に対するコンプレックスをきっかけとしてオウムにのめり込んだ様にマスコミでは報道されています。口の傷が無くても何かのコンプレックスはあり、たどる道は似ていたのでは無いかと思います。

報道内容からの憶測にしか過ぎませんが彼のプライドは相当高そうですし、人に対する嫌悪感も感じます。これは彼を見る事で私の心と共鳴している部分なのかもしれません。

彼も完璧主義な部分が有るのでしょう。オウムを完璧と信じて止まない心がそこまですぐ突進させるものなんでしょうか。私にはまだ彼について何も知らない事を知りました…。

● 新実の判決に関してずっと考えていました。

私の行動が1つのきっかけになっていた事件もありました。

新実は最後の最後、自分の様な高僧は救われるとでも思っていたと思います。

マホームドラとして、考えるとすれば、それだけの人の苦しみを直に背負い、一生考えさせるべきだと思う。

松本について行くだけが生き甲斐だった彼にとっては現世は余りにつまらないし、余りに煩悩的過ぎると思っている事でしょう。そしてその煩悩に生きている人々を卑下して見ている。きっと、松本と一緒に出られる日を妄想していたのだと思いますし、今もそうかもしれません。

彼には無期懲役になっていつか外に出られる日を期待させる事は出来ないとも思いますが、果たしてそれが死刑でいいのだろうか。

私は今回の判決にはやはり問題を感じます。人の心は時間と共に変化するものです。アメリカの様に懲役に1000年とか設定すべきだと思います。(知識は余り無いのですが)。

今は、無期懲役と死刑の刑の重さの隔たりを感じます。なぜ誰もそれを口にしないのでしょうか。それとも私だけが無知なのでしょうか？

人は生きていれば考え方も変わってくる。寿命まで考え抜いて、体だけ拘束しても他の人達と何かで交流していれば、自分のした事は何だったのかを理解するのでは

ないでしょうか？

人が人の寿命を決めていいわけがない。「気に入らない態度」だからと「更生しそうにないから」と寿命を故意に縮めるのは傲慢だと思える。

被害を受けた親族や関係者の方々は、当然一生その傷を癒しながら寿命まで生きて行きます。新実を死刑にする事で本当にいいのでしょうか？

死刑では得るものが無いと私は確信しますし、野蛮過ぎます。

彼は懲役1000年とか2000年にするのがいいのではないのでしょうか。

勿論、私がこんな事を言ってもどうにもなりません。生かす経費の問題や危険性を考えれば、当局も動かないでしょうね。そういう意味では人は動物に少し毛が生えた程度のレベルでしか無いのかもしれませんが。

滝本さんや、弁護士の方々はどの様に考えているのでしょうか。

江川さんもテレビでは、「仕方ない」様な事を言っています。

● 私は今付き合っている彼女には元オウムである事は伝えていません。

それは、伝えられる方にも気力がいるからです。また、自分の気持ちを楽にする為に話す事は絶対に出来ません。その気持ちが彼女に移るからです。少しオウムのかもしれませんが、自分の中で考えを整理しておかないと相手も混乱しますし変な気を遣わせる結果になりかねませんから。今私自身もまだ逃避したりして考えがまとまって

はいませんし、思い出すと心が乱れます。

オウムに共に出家した女性を思い出すだけでもそうなるのですから。勿論、面と向かって話す時には強がったり現世的な事や冗談を言ったりと何も気にしていない風には振る舞いますが、単に壁を作って傷には触らない様にしているだけです。だからいい車に乗ってみたり収入に拘ったり年代の違う女性やタイプの違う女性とつきあってみたりして自分をごまかしているのです。

自分を見失っている事を常に感じます…。

●最後に。

今後、私がした事については、ゆっくりと考えて行きたいと思っています。また、機会を作って行きたいと考えています。

インターネットが今の様に普及している状態ですから、HPをメールサーバーの様にしてメール配信をしてみても如何でしょうか？

カナリヤの詩を送って頂く事の出来ない私の様な人でも、メールであれば、随時送って頂けますし、考えていく事が出来ます。

長くなってしまう済みませんでした。

それでは、お体に気をつけて下さい。

以上



人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない

人は死ぬ (= こわいでしょう)

必ず死ぬ (= どうするおっぴどすか)

絶対死ぬ (= 逃げられませんよ)

死は避けられない (= オウムに入らなければならない!)

麻原さんは「死」について語、ているのである。「入信しろ」とい、ているのだ。

死の恐怖を脅しの材料に使う麻原さんは卑怯である、と私は考える。恐怖で正常な判断を狂わせて、間違、た決断をさせるのが、麻原さんの作戦である。間違、た決断とはオウムに入会することであり、オウムを脱会しないことなのだ。つまり恐怖で頭がよかしくなる、ている人がオウム真理教を選択する。このことを認識していたから、麻原さんはくりかえし、くりかえし「人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない」と語、たのである。

死は人間にとって最大の謎であり、かつ最大の恐怖でもある。だから人間が常に死について考えているわけはわかることは、まあめで正常な「死に対する態度」といえる。誰にも文句をいわれる筋あるいはありません。「死を思え」などと強要するのは余計なお節介である、といわざるをえない。

死を考えるより、生を考えるべきだ。誰が何といおうと、われわれが今、ここ生きてると事實は絶対ゆるぐことはありません。これ以上の真理が必要なのか？ すべてはありありと明らかに現然しているではないか。この生を考えずして、い、た、い、何を考えているのか。生とは何か。よく生きるとは何か。私は今、ここで何をすべきであり、何をすべきではないのか？

生に対して、死はあまりにも不可解である。たしかに生きていく以上、いつか死ぬことになろう。しかしそれ以上のことは誰もい、ま、りしたことはないはずだ。結局死はよくわからぬものなのだ。人間の思考や言葉は「生きること」に対応しているのだから、これは当然の結果なのである。



臨死体験や瞑想体験をいくら重ねたとしても、死については  
 わかるはずもない。なぜなら臨死体験や瞑想体験は「生」  
 の体験だからである。死の一步手前は生だ。生の一歩先の  
 だけだと、生と死の間には無限の距離が横たわっている。だ  
 から死は不可解なのである。死は人間にと、てあまりに近く、  
 また遠い——こういうわがったような、わかんらんまうること  
 どもほごくしかないのである！

魂や輪廻を実体視すること、死についてわが、たづりに  
 なる人も多い。こういうお方は「死」についてモ「魂」につ  
 いてモ「輪廻」についてモ何にもわが、ちやんなるはずである。  
 そのわからぬものどうしをつなげてモ、死についてわ  
 かるはずもないことは明らかではありませんか。彼らは「自分  
 は何がわがったのか、わがっている」と思っている。もう一  
 度、魂と輪廻についてよく考えてみてほしい。そして、  
 「自分はわがっている」とわが、がもしれませんかよ。

人は死がわからぬ。必ずわからぬ。絶対わからぬ。死は  
 避けられないことはわが、けれど、死そのものはわから  
 ない。なぜならわれわれは生きてしま、ているからである。  
 そしてその生すらよくわが、ているからだ。孔子いわく  
 「生もわからぬのに、なんで死がわが、るのや」そのとおり。  
 イギナシ！（イギアリの方はおられますか？）

そのわけのわからぬ死を土台とし、生を築いたとする。  
 その生もまた、わけのわからぬものになることは必定であ  
 る。「砂上の楼閣」という言葉があるが、「死上の生」は、  
 砂の上の建物よりさらに転倒しやすいのである。

これがオウム信者の生き方なのではないか。「オウムの成  
 就者は死を知ら、てあり。〈死後の導き〉ができる」という砂の上  
 に、「死後、信者は救われる」という楼閣を建てている。土  
 台がグラグラだから、盲信というセメントで固めているが、  
 小さな地震でもあろうものなら、生き方が根本からひ、くり  
 かえ、てしまうのである。

話を反転させますが、死について考えるべきだ。ただし条件がある。「死について考えることができる人のみが、死について考えることができる」同語反復だけれど、ちゃんと意味はあります。死を直視してもたじろがない、これくらい強い心の持ち主のみが、死に対してアプローチする資格があるということである。「死」とモロただけで怖がり、心が動揺する人は、その資格がない。

心の強い人が死について考えれば、そこから多くの利益を得ることが出来るだろう。

死は人生のゴールである(とされている)。たとえばマラソン選手は、ゴールをけっまり意識しているからこそ、42.195kmという長い道のりを「よりよく走る」ことができるのである。同じように、死というゴールを意識することは、われわれを「よりよき生」へと向かわせる原動力となるはずだ。このように「死について考えることが自然と、よりよき生を考えることにつながる、ていく」場合にのみ、「死を思え」の教はわれわれにとって有益となるわけである。

つまり「死を思え」には前段階があり、それは「死を直視できるくらい、心を強くせよ」という要請なのだ。「死を思え」と簡単にいうが、実行することがいかに難かしいかについて、まず考えよう。死について考える資格があるかどうかは、自分で決めなくてはならないのである。

心があまりに弱いくせに「死を思え」人がいる。実はこの人は全然死について考えていないことを説明しよう。

たとえば「死」とモロただけで、条件反射的に怖がり、してしまう。そして頭がおかしくなって、手ゴロなところにある「宗教」に逃げこんでしまう。そして彼は「私は死ぬけど、死後救われる」と信じることで、死について考えなくて済んでしまうのだ。彼はそのコンビニ宗教を手離したら死に直面しなければならなくなる。だから一生、そのコンビニ宗教にしがらまれてしまう。これが宗教的(盲信的)「死を思え」の本体である。

あるいは「死」とモロただけで、「こわい」と反応してし

まう。それぞ「魂」だの「輪廻」だのの思想にすがりつく。そして彼は「私は死ぬけど、魂は生まづける。輪廻転生するのだ」と考えることで、死について考えつくろ、てしよう。彼は死というものをなめているのだ。くりかえしにやるが、「死を思う」ことがいかに難しいかを思ひ出していったきたり。「魂」だの「輪廻」だの、頭の中の概念操作だけで、死についてわかるはずないのである。彼はいろいろの概念をまとめているだけで、死そのものについては何にも考えていない。彼は結局、死についてだけは考えたくないのである。だて怖いんだもん。これが思想的(盲信的)「死を思え」なのである。  
妄想

さて、オウム信者諸氏は「死」について考えたことがあるのだろうか。本当に「死を思え」を実行できている信者は、どれくらいいる、しゃることか。

したが、て私は、信者諸氏に次のフレーズを投げかえした。

「人は死ぬ。必ず死ぬ。絶対死ぬ。死は避けられない。

宗教に逃げこんだ人も死ぬ。臨死体験や瞑想体験を重ねた人もいつか本当に死んでしまう。魂だの輪廻だの、わがたよりのことをほざいていっている人も死ぬ。だとしたら、どうすればよいのか。死を直視できるくらい、強い心をつくりあげること。悔いが残らないように生を生きまわることである。

オウムの修行は誤魔化しが多から、どんどん心は弱くなるばかりだ。その証拠に、信者は死を直視できない。このよりのキャラクターを生は、ま、と悔いが残ると私は思うのだが、信者諸氏はどうお考えになられますか？」

(おわり)

(注) 死をなめてはいけな。本気でないので、ちよっかいをかけるべきではない。死に見いられたら、ひどいことになるからね。本手記で私がいいしたが、たのは、「オウムの『死を思え』は間違、とる」ということです。「死を思え」といって、それは入信させようとするだけや。「死を思え」といって、信者かて、死から逃げとるやないか。とこのようにご理解いただきたらと思ひます。

## 「奇跡」の罪

4月28日、NHK総合放送で「スペシャル—奇跡の詩人」という放送があった。脳性麻痺の子どもがドーマン法により奇跡の成長をし、母が手を添えることで文字盤を指差し、素敵な詩を次々と出すという。偶然、見てしまった。「奇跡」の証明は全くされていなかった。母は、文字盤を右手でパタパタ子どもの左手に打ち付け、子の左手は母の左手で上から持たれている。子の目は文字盤から離れ寝もするが、母はしっかりと見ている。

「奇跡」でないのに奇跡と信じたような担当者たち。何を嵌ってしまったのか。組織として訂正することが出来ないままのNHK。黙っていることは出来ず、ネットで知り合った多くの方の協力を得て、6月末「異議あり！奇跡の詩人」（同時代社、1300円）

という本を出した。

こだわったのは、ドーマン法が、有意な成果のない民間療法でありのに、金銭的な多大な負担を負わせつつ、かつ本人に24時間の辛い訓練を強いるからである。

麻原さんの「空中浮揚」宣伝も、それによって格別の違法行為もしないなら場、違法行為をする組織を作るのもなければ何も言わない。別の人がなんか2メートルとか空中浮揚するそうだが、トラブルもなさそうなので文句も言わない。自分の子が信じれば説得するが、職務とは関係がない。

「奇跡」を言うことは、ときに罪を増大させる効果をもつ。

<http://www.cnet-sc.ne.jp/canarium>

歌を忘れたカナリヤは  
後の山に捨てましょか  
いえいえそれはなりません  
歌を忘れたカナリヤは  
背戸の小藪に埋めましょか  
いえいえそれもありません  
歌を忘れたカナリヤは  
柳の鞭でぶちましょか  
いえいえそれもありません  
歌を忘れたカナリヤは  
象牙の船に銀の櫂  
月夜の海に浮かべれば  
忘れた歌を思い出す

◎カナリヤは歌を思い出す手助けをする。

◎カナリヤは自分で自分の歌(考え)を歌う。

◎カナリヤは歌を歌えなくなつた鳥を乗てるのではなく、温かく見守る。

(地球の揺りかごで)

発行カナリヤの会

連絡先 〒242 神奈川県大和市中央2~1~15 パークロード大和ビル2階

電話 0462~63~0130 大和法律事務所 窓口滝本太郎気付

FAX 0462-63-0375

購読費・カンパ 横浜銀行大和支店 普通1343078 カナリヤの会滝本太郎